

ブルガリアにおける社会体制の変化に伴う羊の移牧の変貌

URUSHIBARA-YOSHINO, Kazuko / 漆原, 和子

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

60

(開始ページ / Start Page)

97

(終了ページ / End Page)

111

(発行年 / Year)

2010-03-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006750>

ブルガリアにおける社会体制の変化に伴う羊の移牧の変貌

漆 原 和 子

要 旨

ブルガリアでは1989年に社会主義から自由市場経済へ、そして、2007年にEU加盟を果たした。こうした社会体制の変革に伴って、伝統的な羊の移牧がどのように変わったかを明らかにし、将来の産業としての展望を試みた。

ブルガリアは、第一次世界大戦前までは、広域にわたっての二重移牧を行っていた。夏にはブルガリアのスタラ山脈や、ロドピ山脈の1,400～1,600mの高地に移動し、冬はエーゲ海岸へ、黒海沿岸へ、そしてトルコへの移動を行っていた。ブルガリア人は基地となる母村を有していたが、カラカチャンは全財産と、住居ごと移動を行った。しかし、第一次世界大戦後はエーゲ海岸へは移動できなくなった。第二次世界大戦後は現在の国境が定まり、社会主義体制の下で移牧が行われていた。当初、カラカチャンの羊の移牧に対しては自由な放牧が許されていた。しかし、1959年の社会主義体制の強化とともに、羊の自由な放牧が許されなくなり、畜舎を用いた羊の放牧の集団化が行われた。特に高地では夏の間の畜舎での放牧を“夏のキャンプ”と呼んだ。効率の良い羊産業の生産性を狙うことと、自由な山地の民を定住させ、集団化させることで社会主義体制の徹底を行った。この集団化は羊の伝統的な移牧の技術的伝承の機会を奪うことになった。大量の羊を連れて移牧することは高地の草地を、ある意味では維持してきた行為でもあった。しかし、この集団化は灌木林の進入、草地の質の悪化を招いた。スタラ山脈では、この時から羊のストレスが減少した草地は、現在は林地へ移行しつつある。遊牧の民であったカラカチャンは、この時から彼等のアイデンティティーであったギリシャ語からブルガリア語教育へ、移牧から定住へと変換させられた。従って、1989年の社会主義の崩壊時には、移牧を再度行うカラカチャンは1人もいなかった。ロドピ山脈ではブルガリア人にとっても“夏のキャンプ”は少数の牧畜を除いて、人々の羊の移牧の技術を失わせるものであった。

1989年以後の羊の頭数は激減をし、それ以前の1/5に減少した。しかし、2007年のEU加盟後も横ばいを続けている。この羊の頭数の変化は高地における草地の変化にも表れていて、1989年の革命直後からマツが草地へ進入してきていることを確認できた。

EU加盟によって、チーズ造りは設備の整った工場で実施しなければならない。羊の長距離の移牧をすることによって、羊にストレスを与えてはいけないなどの条件を満たせないために、羊主体の生業から転業する人々がいる。一方、補助金を出して羊農家を育成しようとしているが、EUの視察団が一户の羊農家のために毎月派遣される等の、経済的に効率の悪い方法をとっている。またEUの補助金がうまく牧畜農家に回らないなどの問題点を抱えている。草地の質の悪化、林地の進入などを考えると、羊の移牧に対するポテンシャルの低下が観察され、今後のブルガリアには社会主義時代同様の羊産業の生産性は期待できない。

キーワード：羊の垂直移牧，ロドピ山脈，スタラ山脈，カラカチャン，EU加盟

1. はじめに

本研究はルーマニアと同時期に社会主義化し、同時期に自由経済化（市場経済化）し、また、同時期に EU 加盟を果たしたブルガリアの移牧（漆原、2009）の実態を明らかにしようとするものである。

EU 加盟直後の 2007 年の調査結果については、すでに漆原・ペトロフ（2008）に述べた。今回は 2009 年 8 月の調査結果について述べ、EU 加盟後のブルガリアの羊の移牧の現状について、調査結果をまとめて報告する。

ブルガリア共和国はバルカン半島東北部に位置し、北はルーマニアに、西はセルビアとマケドニアに接し、南はギリシャとトルコに接する。ブルガリア共和国の北はドナウ川で限られ、東は黒海に面する。国の中央部にはドナウ川の南に東西に長軸を持つスタラ（Stara）（バルカン）山脈がある。2009 年 8 月の調査は、このスタラ山脈の北斜面と南斜面で行った。このスタラ山脈の南に平行して、ロドピ（Rodopi）山脈が走る。2007 年 9 月の調査地域はロドピ山脈の南斜面である（第 1 図）。ロドピ山脈の南は半乾燥気候の特色を持つ地中海性気候である。

ブルガリアの 1900 年以降の国境の変遷については、漆原・ペトロフ（2008）にすでに詳しく述べた。第一次世界大戦までのスタラ山脈、ロドピ山脈とその周囲の羊の移牧は、エーゲ海沿岸や、黒海沿岸まで広く冬に草を求めて移動が行われていた。聞き取りの結果と総合して判断した、第一次世界大戦前の羊の移動のルートを示した。

第二次世界大戦ののち、1946 年にはブルガリア人民共和国となった。その後、社会主義体制への移行をとげ、ブルガリア共和国と名称をかえた。1989 年にはこの体制は崩壊し、自由経済体制へ移行した。2007 年 1 月には、ルーマニアとともに EU 加盟を果たした。

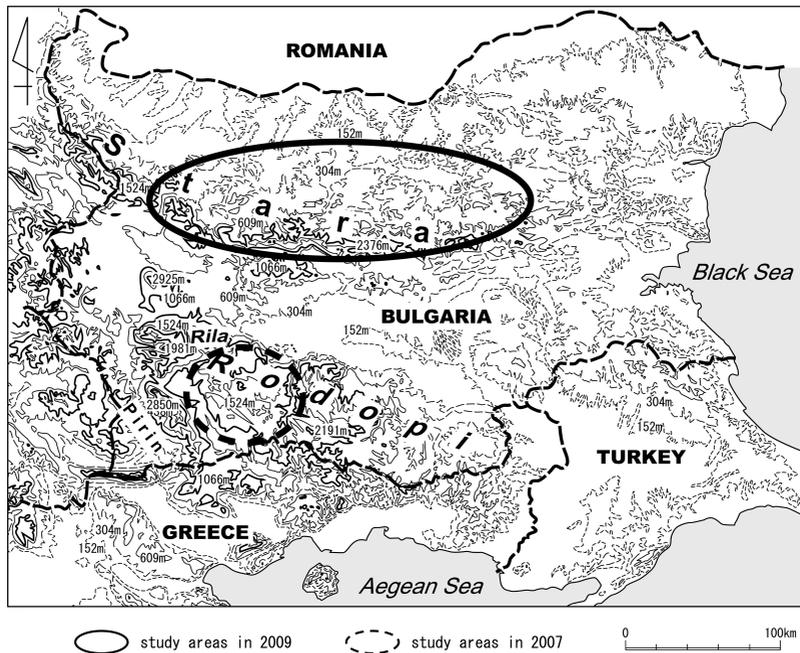
ブルガリアは、ルーマニアと同様に古い山脈に残る複数の準平原面を利用して、羊の移牧が古くから行われていたところである。羊の移牧は、国境の変化、政治体制の変化をルーマニア同様に受

けた。（MORI, K., et.al,2006 ; URUSHIBARA-YOSHINO, K. and MORI, K., 2007）この政治体制の変化によって、近年の羊の移牧がどのように変化してきたかを知ることと、EU 加盟によって、羊の移牧の持続的発展が可能かどうかを考察することをこの研究の目的とした。

2. ブルガリアにおける羊の移牧

ブルガリアの西部を南北に走るピリン（Pirin）山脈や、ソフィアの南部にあり、東西に走るリラ（Rila）山脈においても羊の移牧が行われていた。最高峰は約 2,900m であり、氷河地形が残されている。最も高い山頂部の草地は、今は移牧に利用してない。しかし、ロドピ山脈では、約 1,600～1,800m と 1,200～1,400m の準平原面の草地は今も部分的に移牧に用いている。冬は干草を利用し、基地となる村で飼育する。夏の 5 ヶ月間、準平原の上で放牧する。ブルガリアの南部を東西に走るロドピ山脈はプレカンブリア時代の結晶片岩からなり、最高峰は約 2,200m である。約 1,400m から 1,700m に準平原面が連なり、これを移牧に用いている。第二次世界大戦前は、はるかに多くの羊を放牧していたという。また、89 才の老人は、ルーマニアのワラキアから南下してきた牧童が、羊をつれてエーゲ海沿岸に向けてさらに南下したのを記憶している。ロドピ山脈からエーゲ海岸への移牧については、漆原・ペトロフ（2008）の他に、CHANG（1999）や EFSTRATIOU（1999）も詳しく述べている。今回の聞き取りと合わせて、第一次世界大戦までの移動ルートを第 2 図に示した。当時は、ワラキア人は現在のルーマニアから、カラカチャニはスタラ山脈から移動し、エーゲ海岸に達した。

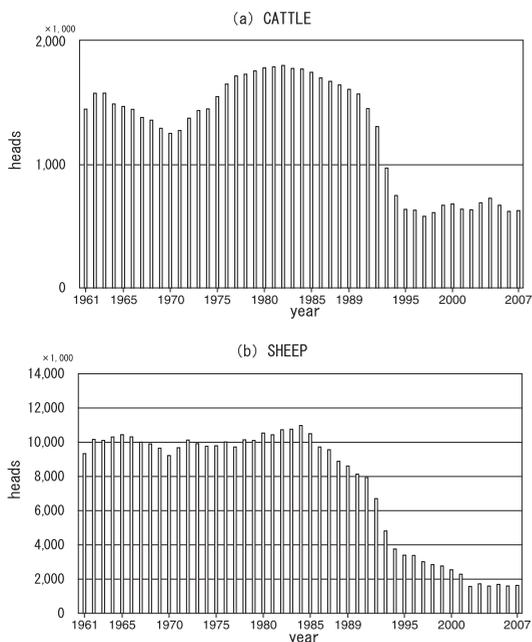
ロドピ山脈では、第二次世界大戦後、社会主義体制のもとで、羊の移牧も集団農場化された。牛・羊・ヤギや土地はすべて共有化され、夏には基地となる村々から 1,400～1,700m まで羊を移動させた。1 つの集団農場は、50 人以上の牧童がおり、大きな羊の畜舎で、人も羊も夏を過ごした。



第1図 調査地域の概略図



第2図 ワラキア人 (Walachia) とカラカチャン (Karakachan) の羊の移牧と冬の営地への移動ルート



第3図 ブルガリアにおける牛と羊の頭数の変化
(FAOのデータによる)

これを「夏のキャンプ」と称した。しかし、1989年の社会主義体制の崩壊によって、集団農場は解体した。ブルガリアにおいて行われた羊の垂直的な移動様式の変化は、漆原・ベトロフ(2008)に述べた。第一次世界大戦前は基地の村を中心として、高地と低地に移動する二重移牧(SHIRASAKA, 2007)であった。その後の国境の変化により、エーゲ海沿岸や黒海沿岸の低地への移動のルートが断たれ、高地への移動のみの、垂直移牧になった。また、社会主義体制下では、効率の悪い山地最高部での移牧が行われなくなり、1,700mまでの移動となった。またスタラ山脈の遊牧民であるカラカチャンには1959年、集団化が徹底された。ギリシャの国境に近い山地で移牧を行う民に対しては1960年代初めに北への移動と定住化が強制された。スタラ山脈における2009年8月の調査結果は、3章以降に示した。

第3図には1961年から2007年までのブルガリアの牛の頭数と羊の頭数を示した。1961年から2007年まではFAOの統計により、2005年から2007年まではブルガリアの統計も用いた。これに

よると、社会主義体制のもとでは、羊も牛も極めて多く飼育されているにもかかわらず、1989年以降に激減した。社会主義体制崩壊後4年で、羊は社会主義体制時の1/5に、牛は1/3に減少したことがわかる。

ブルガリアはEU加盟を2007年1月に果たした。この時期はルーマニアとほぼ同時である。ブルガリアの畜産に対するEUの方針の主なものは以下の通りである。

- i) 羊とヤギを主力とする。
- ii) カラカチャンスキー(羊の種)を保護する。
- iii) チーズの製造はマンドラ(工場)で行う。

この条件を満たすため、マンドラまで各農家が羊の乳を運ばねばならなくなった。マンドラのハードルは高く、既EU加盟国と同様に冷蔵庫を備えた、衛生基準を満たすものでなければならない。この条件のうちii)は、ルーマニアには課せられていないブルガリア独自の条件である。

3. スタラ山脈とバルカン山脈およびその周辺の羊の移牧の現状

スタラ山脈はブルガリア北部に位置し、ほぼ東西に走る山地であり、アルプス造山運動によって形成された古生代末～中生代の地質からなる。とりわけ中生代ジュラ紀の石灰岩地域が広く分布する。この山脈では1,500～1,600mより高地に草地在り、牧草地(pasture)として利用されていた。現在も利用されている1,400～1,500mの高地の牧草地を写真1に示した。低地部は約350～500mで、ヒマワリ、トウモロコシ畑として利用されている。以下にこのスタラ山脈の北斜面と南斜面において羊を飼育している人々からの聞き取り例を示す。

(聞き取り例1)

ブラツァ(Vraca)におけるカラカチャン
カラカチャン文化保護協会の会員 Mrs. Ianka
BRATANOVA

ブラツァは市街地の人口は8,000人であるが、



(2009年8月漆原撮影)

写真1 ブラツァの西、1,400～1,500mのジュラ石灰岩台地の羊の夏の放牧地
現在も羊の放牧に使用されている草地 (Pasture)

郊外の22村も含めると12,200人である。カラカチャンは少数民族であり、山岳部で羊とヤギを主とする牧畜をおこなっていた。第二次世界大戦のち、羊の放牧においても社会主義体制の強化がおこなわれた。それ以前は、カラカチャニはこのブラツァ付近には140世帯が住んでいた。イアンカブラタノバの家では戦前は1,500頭の羊、150頭の馬とロバ、犬がいた。冬は全員がエーゲ海の沿岸までいき、夏はブラツァ山地の1,486m前後の高地に羊を放牧した。カラカチャニは、もともと組織化を好まない民族であったが、1959年に集団化が強化された。カラカチャニは一定のキャンプに集められ、自由に移動し、放牧することがゆるされなくなった。社会主義体制が崩壊すると、カラカチャニの若者は教育を受けるため、羊の放牧から離れた。多くのカラカチャニは、羊を飼わなくなった。羊を所有していても、どの家も一戸で10～12頭の羊しか所有しなくなった。自分の父は社会主義崩壊後も1,200頭の羊を持って、チーズ、ヨーグルトを作り、肉は大きな市場があり、そこで売った。

カラカチャニはギリシャ語を話す少数民族であるが、15～16世紀にはトルコの羊を飼う民族であるUruk(ウールック)をつれてきて、ブルガリアのカラカチャニと共にこのあたりで住まわせ、

同化をはかったという考え方の一つが示された。しかしカラカチャンの起源については後述するように、いまだ結論は得られていない。

(聞き取り例2)

カメノポレ(Kameno Pole)の役場で村長の秘書をつとめる女性、Mrs. Veneta CRASTEVA(50才)

夫49才、息子2人(24才、20才)息子は2人とも牧童にはなっておらず、建設業者のもとで働いている。

この村は石灰岩地域で、カルスト湧泉があり、水場がある。この村には740人が住む。そのうち140人が一時的な居住者である。300世帯からなる。この村の家畜の統計上の数は羊350頭、ヤギ200頭、牛350頭、水牛ブルス(Buls)100頭であるが、実数は申告する統計上の数を倍して考えた方が良い。ブルスの放牧の様子は写真2に示した。EU助成金の支給は以下のとおりである。

2007年にEU加盟を果たした後の助成について、年ごとに助成金の算出方法が異なる。2008年、2009年のEUの助成では、専業牧畜農家の場合は助成が得られ、兼業の場合は得られなかった。

羊：2008年は50頭以上の羊を所有しているときに、羊1頭につき15€/年の助成が得られた。



(2009年8月漆原撮影)

写真2 放牧されているバッファロー (Buls)
Kameno Pole 付近

2009年は20頭以上の羊に対して助成する予定。例えば2008年に80頭持っていた場合、 $15\text{€} \times 80 = 1,000\text{€}$ の助成が得られた。しかし、2009年は20頭しか持っていないとすれば、今年も助成は得られない。この村の羊の種は、Kameno種というローカルな羊で、頭が黒い。血が濃くなるのを防ぐため、隣村の雄羊と売買して交換する。社会主義時代に別の種をこの村に導入しようとしたが、定着しなかった。羊の種つけのため雄羊を借りる場合、[1頭の雄につき5lev] × 雌の頭数として、代金を払う。これは助成の対象外。

ヤギ：羊と全く同じ条件で助成

牛：2008年は10頭以上の場合に助成が得られた。1頭の乳牛が年に1,000kg以上の乳を出す場合、助成が得られる。条件を満たせば、1頭25€/年で助成金が得られる。2009年はどのようになるか不明。

水牛ブルス (Buls)：2008年は助成金の対象ではなかった。2009年は5頭以上の場合に助成対象とする意向。水牛の種付けは、[1頭の雄につき20lev] × 雌の頭数で支払う。ただし、生まれなるときはリピートする。

羊の搾乳は4月15日から8月末までである。ヤギは10月末まで搾乳をするが、そのあと、乳を採

るのをやめる。その他の時期は子羊、子ヤギに飲ませるため、搾乳はおこなわない。乳の量は6月が最大で、1日に1ℓ出す。しかし8月末には0.5ℓ/日に減少する。乳を直接市場に売ることもあるが、チーズ (フレッシュとイエロー)、バター、ヨーグルトをつくる。羊の乳が採れない時期は牛か水牛を用いる。

EUの助成に対しては満足していない。書類作りに多くの時間をとられる。書類は2週間以内で提出しなければならない。例えば、今年も2009年9月10日に締め切りであり、それ以前に出したければ、袖の下を使わなければならない。

(聞き取り例3)

カメノ ポレで牧童をしている53才の男性 (Mrs. Veneta CRASTEVAの義兄)

今はこのあたりの共同の牧草地 (common pasture) で放牧している。個人の牧草地もあり、冬は1月～2月に1ヶ月間積雪があるので、冬は個人所有の牧草地から採草した乾草を用いる。草刈は、5月末～6月に年に1回のみおこなう。今扱っているのはヤギ40頭、羊150頭、犬3頭である。搾乳は1日に2回。ただし、8月は夕方に1回のみ。石灰岩地域であるため、karst lakeが近くにあり、その水を飲ませる。20年前から牧童をやっている。祖父の代から牧童である。以前はヤギは1mよりも樹高が高い灌木林に入れ、羊は草地に入れて、それぞれわけて飼っていたが、今は一緒に入れている。戦前はこのあたりは20,000頭の羊がいたといわれている。この人の記憶では社会主義時代は7,000頭であった。

(聞き取り例4)

カメノ ポレで水牛のみを扱っている牧童52才男性 (15才からやっている)

15才から牧童をしていて、15年間水牛ブルスのみを扱っている。今は97頭の水牛と2頭の馬を扱っている。乳は1日に15ℓ搾乳できる。子牛が生まれてから20日間は乳量は大であるが、乳は採らない。5月～6月は、脂肪は少なく10ℓ/日にな

る。8月は脂肪が高まるが、4～5ℓ/日である。冬はトウモロコシを与える。Kamen Poleはカルスト湧泉があり、水量があるので、水牛を飼うことができる。

(聞き取り例5)

Mr. Ivan VPZVETKOV VIVANOV (50才)

妻、娘1人、息子1人

社会主義時代は、コンミュンで4,000～5,000頭の羊を扱っていて、このあたりには、羊のための牧草地が24ヶ所あった。生産量の大きなコーカサスからのハイブリッド種の羊を扱った。子羊はアラビア諸国、特にイラクへ売って石油を購入した。サラリーとして牧童(労働者)は給料の他に、ミルク、毛、皮や肉等ももらった。この他に2,000頭の個人所有の羊がいた。個人所有は1戸で最高10～15頭所有することができて、これは無税で所有できた。社会主義の崩壊後、すべての羊を売って金銭にかえた。羊を他人にわけることはしなかった。

(聞き取り例6)

Emen (ベラコシュコ台地の西縁)

Cavdar BOGUTEVI (53才)

Ezra BOGUTEVI (48才)、娘 Erica (23才)、息子 Yasen (27才)

ロドピ山脈の南斜面コザリ(Kozari)村出身、祖父母は社会主義体制下で、政府に強制的にギリシャ国境のコザリ村からスタラ山脈のこの地へ移動させられた。政府はギリシャ語を話し、山地を知り尽くし、羊を山地で放牧する民が国境付近に居住していることを警戒し、山地で移牧をする人々を集めて集団化した。従って、この人々は羊の放牧もやめて、集団農場で放牧をした。このことは本来移牧をしつつ、良質の草を食べさせ、とりわけ若い羊の育成状況をにらみながら行う、本来の移牧をする人々の生産意欲を削ぐことにつながった。また伝統としての移牧の技術も、この時点で失われた。

祖父母は、600頭の羊とヤギを持っていた。腰

にベルトをし、ナイフを付け、タバコ用の火つけ石をいつも持っていて、紙で巻いてタバコを吸った。冬はコパラン(Koparan)というガウンのような上着を羽織った。オオカミや熊がいるので、いつも銃を持ち歩いていた。祖父母が北へ強制移動させられた後、心配をした父と母が3才のCavdarをつれて北のこの地を訪ね、そのまま定住した。その後も、1980年頃にロドピ山脈からこの北の地へ移動した人々もいた。

私たち夫婦は、今は雌羊70頭、子羊90頭で3頭の雄羊を所有している。雄は2年に一度交換する。冬には最高15cmの積雪があるので、6haの草刈り場から干草を作る。主として肉用の子羊を育てている。EU加盟後の補助金には満足はしていないが、選択の余地は無いと考えているので書類は作成して提出している。

(聞き取り例7)

スリベンの西側、スタラ山脈の南側山麓部 236m a.s.l.

Ivan HLEBAROV (45才)

Marina HLEBAROV (45才)、息子 Detar (25才)、Dimitar (24才)

羊500頭(雄羊18頭、雌羊422頭)、次世代用子羊60頭)、ヤギ20頭を所有しているが、将来は羊の頭数をもっと増やしたいと思っている。今の羊の品種は1頭しか生まないタイプなので、2頭生む品種を輸入したいと考えている。一家族4人と、2家族(ロマ人)の労働者を住み込みで雇っている。1労働者あたり200€/月+50kgの小麦粉+家(電気・水道代・薪を含む)を支払う。写真3に、ロマの牧童と約500頭の羊の群れを示す。草は多種からなり、良質である。

羊は最高5才までで、平均3才である。羊のミルクは(1.5ℓ/1頭)×120日とれるが、子を生んだ後1.5ヶ月はミルクをとらない。将来フランスの羊をいれたい。フランスの羊のミルクは、1頭3ℓ搾乳できるので、チーズ・ヨーグルトの生産量はあがる。夏と春、秋は山地の方が良い草である。山麓部では常に放牧するが、夏にこの標高に地下



(2009年8月漆原撮影)

写真3 スリベン付近の羊の放牧 牧童は雇われているロマ
標高約240m付近

水が出なくなると、800mの山地斜面にある水を飲ませるため、高地に移動する。山麓部もハーブが混じる良い草である。いつも牧童は群れの先頭を歩く。羊の群れはその後をついてくるが、賢い、常に牧童のそばにいる羊にホプカ(Hlopka)を付ける。

社会主義体制の時は、国としては約10倍の羊がいて、1,500万頭だったと記憶している。今は、数は少ないが、将来に向けてラムを増やしていきたい。今は仲買人が来て、25kg前後の羊を40～50€/1頭で買って行く。ギリシャ、イタリアのイースターの日と、オーソドックスの聖ジョージの日(5月)に向けて出荷する。12月、1月に子羊を生むと、5ヵ月後の4～5月には25kgに達する。1～3月には干草とトウモロコシ、麦なども与える。このごろはオオカミに5頭/年やられるようになったので、牧童はハンターでもなければならぬ。

Nature parkのプロジェクトに参加していて、3年で伝統的な羊や馬のシェルターを作ろうとしている。かつてのカラカチャンと同じ方法をとりたいと思っている。草地の回復を図る場所を130ha

と決めて、Nature parkの専門の人々と協力して、緑を回復させ、イーグル—モグラ—イネ科の草本の系をもつ生態系を取り戻そうと考えている。バルカン山脈の北斜面は森林で、南傾斜には地中海性の植生も混じるので、草地化は南傾斜で行う予定である。

Nature Parkでは、1,300mの高地にカラカチャンの祭りを実施するため、ブナの枯木や枯葉で作ったかつての住居カピツァを常設してある(写真4)。この農家が利用する草地は、800～230mまでの高地である。

(聞き取り例8)

Mr. Peter GERGEV PETROV (86才)

Mrs. Panajotka PETROVA (83才)

今はスリベンのカラカチャン地区に住む。ブルガリアには多くのカラカチャニが住んでいる。全ブルガリアでカラカチャニは18,000～19,000人はいるだろう。このSlivenのカラカチャン地区には約100世帯が住んでいる。

私(夫)は9才から牧童をしている。妻とは山で羊の移牧をしていた頃、出会って結婚した。第



(2009年8月漆原撮影)

写真4 カラカチャンの用いる住居カピツア。ブナの枯枝と枯木で作る。標高1,300mにカラカチャンの祭りのために用意されたもの。

二次世界大戦前は、4人家族で500頭の羊を扱った。馬20頭とヤギがいた。馬はカラカチャンが飼う小型の力の強い馬で、「カラカチャンの馬」といわれる種である。少数のロバもいた。

5月上旬から10月中旬までは1,000m前後の高地にいて、羊に草を食べさせる。冬は黒海沿岸やエーゲ海沿岸に向けて、約300～400kmを全ての荷物を馬に乗せて羊と共に移動した。2週間かけて約400kmを移動するので、40km/日平均の速度で移動した。Bur Gas（黒海沿岸）の近くにもよく行った。衣類やテントは全て羊の毛で作った。自分達で羊毛から糸を作り、布を作った。国民の日には民族服を着用するが、民族服は世代から世代へ渡す。しかし、1959年に集団化し、畜舎に入れて羊を飼うようになってからは、全く移牧はしなくなった。従って、山地での生活は、その後どのカラカチャンもできなくなった。1970年に、羊をわずかな頭数ではあるが、政府は個人所有する

ことを許した。これは、1989年の崩壊時まで続行して許された。1989年社会主義体制の崩壊後は、息子達も牧童であることをやめ、別の仕事についた。1人の孫息子は前出のHLEBAROV家で牧童として働いている。

(聞き取り例9)

カラカチャン博物館での聞き取り (Sliven)

カラカチャニとは少数民族であり、民族的な固有性を強く持つグループをいう。山地地域で羊を移牧していた民族であり、「山地のギリシャ語（方言が強く、約500語の古代ギリシャ語も用いる）」を話す。第二次世界大戦前は男子のみブルガリアの学校へ行き、家ではギリシャ語を、社会ではブルガリア語を用いた。

戦後の社会主義体制下で、初めは戦前同様に自由に山地で羊の放牧や移牧が許されていた。しかし、1959年社会主義強化の際に、強制的に羊を集団化のもとで飼うことを強いられた。羊を畜舎に住まわせ、集団で生活することを強要された。この時から男子も女子もブルガリア語を用い、学校へ通わされた。伝統的な山地での羊の移牧は、この時に消えてしまった。1989年の社会主義体制の崩壊によって自由に仕事を選べたが、もはや牧童に戻ろうとする人はいなかった。羊を飼うことからほとんど全員が離れて、他の仕事を求めた。今でもギリシャ語を話せることを生かして、約30%のカラカチャンが季節労働者としてギリシャに働きに出ている。①ギリシャ語を話せる、②正直である、③社会的に問題を起こさない、という点からギリシャではカラカチャンは受け入れられている。

カラカチャンの戦前までの伝統的な生活は、羊の移牧を中心とする。カラカチャンの移牧は、まずブルコビツアの山地へ5月の聖ジョージの日に移動する。秋にはストゥルマ (Struma) 谷へ降り、冬は北ギリシャからエーゲ海沿岸へ移動する。冬は特別なマント、コパランを着て移動した (写真5)。但し、エーゲ海沿岸まで移動できたのは第一次世界大戦前までである。



(2009年8月漆原撮影)

写真5 カラカチャンの冬のマント コパラン
ヤギの毛で作る スリベンのカラカチャン博物館にて

1グループは、約10世帯で5,000～6,000頭から最高20,000頭の集団で移動した。カラカチャンはブルガリアの山地地域ばかりでなく、セルビアの山地にも住んでいた。今はスリベン District には約5,000～6,000人がいる。集団が大きいつきには、必ずカラカチャン同士で結婚した。しかし、集団が小さいときはやむを得ず、ブルガリア人と結婚した。

4. カラカチャン

カラカチャンはギリシャ語を話す少数民族で、高地から低地へ移動しつつ、基地の村を持たず羊の移牧を行う少数民族のことである。漆原・ペトロフ(2008)ではカラカチャンとは牧童であると記述したが、ここで訂正する。

PIMPIREVA, E. (1994) の出版した、「ブルガ

リアのカラカチャン」の中から戦前のカラカチャンの民族に関する記述に若干の考察を加えると、以下のようなものである。

ブルガリアにおけるカラカチャンの人口は、1905年の国勢調査では、全ブルガリアで6,128人、1910年の国勢調査では7,251人、1920年の国勢調査では2,412人、1956年の国勢調査では2,085人、そして1991年には5,144人となっている。これらは本人の申告にもとづく人口である。社会学的調査(1992年)によれば推定12,000～15,000人とされている。しかし、1994年のブルガリア・カラカチャン文化教育協会によれば、14,000～15,000人いるとされている。以上のように正確な人口は不明である。

1990年代初めのカラカチャンは、新団体、新協会の結成と、ギリシャとの交流に重きが置かれていて、ギリシャ語研修、労働研修が行われている。

戦前までのカラカチャンの民族学的記述では、結婚は親が決める。カラカチャンはカラカチャンからしかパートナーを選ばない(同族婚姻)。現在は定住化したカラカチャンが隣接して生活するブルガリア人をパートナーに選ぶことがある。また、核家族化が進行し、末っ子が父母や祖父母と同居する傾向があるとしている。

カラカチャニはバルカン半島の様々な共同体(小林, 1974)の中でもユニークで、遊牧民であり、高地や山岳、そして温暖な低地の草地を求めて家族、家財道具と共に移動した。カラカチャニが移動生活を送っていた当時(1959年以前と思われる)、春と秋におびただしい数の羊の群れと、牧羊犬と共に移動した。ブルガリアで移動生活を送っていた最後のカラカチャンの家族が定住して、すでに30年以上経つ。この記述は1959年のカラカチャニの羊の移牧を集団化したことにより、移牧が政府の方針として行われなくなったことと一致している。

バルカン半島には様々な型の移牧が行われてきたが、カラカチャニは最近まで移牧を営んできた人々のひとつである。ロマンス系言語を話すヴラフ＝アルーマニアと呼ばれる人々と、ギリシャ語

を話すカラカチャニがいる。両グループには言語ばかりではなく、文化領域においても多くの違いがある。ヴラフ人は中世にかなりの人々が定住した。

カラカチャニの起源はいろいろな説があり、未だに文書史料にもとづく定説はない。起源をギリシャ人であるとする説には第一に、古代からギリシャ山岳地帯に住んでいた遊牧民の末裔であるとするもの、第二に定住したギリシャ人農民が14世紀に最初の定住地をおわれて、遊牧民となったとするものである。また、カラカチャニは古代にギリシャ語化（ヘレニズム化）されたトラキア人、イタリア人、モエシア人だとする考えもある。デュルク起源説は11～13世紀にデュルク系言語からギリシャ語へと言語を変えていったとする。カラカチャニ伝承として語り継ぐのは、ピンドゥス山脈（ギリシャ）を故地と考えている。18～19世紀の圧政から逃れるために移住し、牧羊を始めたとする説もある。しかし、いずれも仮説の域を出ない。

遊牧民共同体

共同体で生活をし、経済活動を組織した。この共同体はオドジャク、スタン、コムパニキと呼ばれ、遊牧的生活形態が存在する限り機能した。即ち、20世紀前半までは存在した。カラカチャニのオドジャクは6ヶ月間（つまり、一つの経済生活期間）だけ一つになる、さまざまな数の家族から構成される。オドジャクの核はリーダーの家族を中心に、彼の兄弟、息子たち、いとこの家族から構成される。血統あるいは婚姻関係によって結ばれた近親家族が、それに加わる。スタンに含まれる家族数は草地の大きさと各家族が所有する羊の頭数による。オドジャクの大きさは季節にもよる。すなわち、夏は大きく、冬は小さい。それは家畜にやる草の確保の問題や出産にまつわる特殊な事情によるものだ。集団は規模を変え、時の経過とともに次第に小さくなった。多くの家族が越冬を独立して行い始めた。

ケハヤは通常、より多くの羊を所有するもので、

リーダーとしての地位は父から子へと引き継がれることが多かった。共同体の構成員以外に雇用される羊飼いはいる。羊飼いはチョパノス、又はデュロスという。1930～40年代は多くのカラカチャニの青年がブルガリア人の下で牧童として働いた。羊の放牧のための労働契約は、夏については5月6日の聖ゲオルギの日、冬については9月26日の聖ディミタルの日、又は聖デメトリオスの日に行う。夏と冬の草地への移動は40～50日に及ぶこともあり、ルートや休憩地は予め決められていて、リーダーは予め下見をしておく。夏の草地への出発は3月9日の聖サランドスの日の頃に行い、冬の草地への出発は9月14日のスタヴロスの日の頃に出発した。出発準備は一日で行い、住居も全て畳んで移動した。

以上の様に、今は全く羊の移牧から離れてしまったカラカチャニの生活実態が描かれているが、今日では羊の放牧をする文化を失ってしまい、技術も草地もほとんど失ってしまったといえる。

5. 1989年の自由市場経済化とEU加盟後の変化

1989年の自由市場経済化によって、すでに牛も羊もブルガリアの総数は著しく減少した。個人所有になっても多くの人々は牧畜業から離れてしまった。多くの人々は小規模に羊を飼うのみで、最大200～500頭であり、一般には一世帯約20頭の羊を持っていて、その放牧は牧童に委ねるのが普通になった。

このことによって植生に大きな変化が表れている。写真6には、すでに1989年以降に著しく羊の放牧によるストレスが減ったために、シダや灌木が進入してきている地域を示した。また社会主義時代に森林化をはかった地域から種子が飛来し、草地がマツの林に変化しつつあり、マツの樹齢が15～21年に達していて、社会主義の崩壊とともにマツ (*Pinus sylvestris*) が進入してきたことがわかる（写真7）。

2007年1月のEU加盟後の人々の聞き取りによ



(2009年8月漆原撮影)

写真6 1989年以降、羊の牧草地として使用されなくなった草地
灌木、シダ類が進入



(2009年8月漆原撮影)

写真7 すでにマツ (*Pinus sylvestris*) の進入した放牧地
スリベンの北西約15km、標高約900m、マツの樹齢約20年

ると、多くの意見はEUの補助金申請にきわめて多くの時間を必要とする。書類の申請できる期間がたった2週間と定められていて、小数の羊なら補助金申請しない方が良いというものであった。一方では2008年夏にはEU補助金を配分する側の役人の汚職が多数摘発され、補助金の一時停止に

まで発展した。このような汚職が起る背景を一掃しなければEU加盟国に肩を並べられないと考える人々もいる。

2007年には80頭の羊の飼育を始める人へのEU補助金受領のために選ばれた人の視察をするため、ソフィアから役人が何人も出張してきて、毎月チ

エックする。これだけの金額を出張費にあてることのできるなら、補助金を増加することができるであろう。こうした制度の無駄を検討しなければ、羊ばかりでなく、牛やヤギの畜産業も1989年以前のように基幹産業とはなり得ないと著者は考えた。

6. まとめ

1. 第一次世界大戦後には、羊の移牧は山地(1,000m以上)で夏をすごし、10月以降は黒海沿岸ルート、トルコへのルート、ギリシャのエーゲ海沿岸へのルートがあり、冬場を低地の草地ですごす方法をとっていて、カラカチャニは定住化しなかった。しかし、カラカチャニ以外のブルガリア人はロドピ山地では600m前後に母村があり、夏は山地へ移動した。そして冬上記のルートで黒海沿岸、エーゲ海沿岸などへ移動した。
2. 社会主義体制下では、カラカチャニのような山の民が自由に移動して歩くことを恐れて、定住化、集団化させられた。ギリシャ国境でギリシャ語を話せる牧童達がギリシャと通ずることを恐れて、北のスタラ山脈の山麓部に強制移動させられた。カラカチャニの定住は1959年に行われ、ギリシャ国境付近のブルガリア人の牧童は1960年ごろに移動させられた。しかし、集団農場で羊の放牧をすることは、これまでの山地の草地に広域にわたって羊のストレスがかかっていたものが開放されるため、高地の草地を次第に林地化させてしまった。
3. 1989年の自由市場経済化では、もはや大規模な移牧をする人々はいなくなった。きわめて小規模な羊を、垂直的に移動させるか、近距離で放牧をするのみである。ロドピ山脈の山麓部では、1世帯で200頭が最大である。スタラ山脈の南斜面では、1世帯で約500頭を飼う牧畜業者が出現している。しかし、こうした

大規模な牧畜農家はまれであり、EUの補助金制度も残念ながら十分に機能しているとは言いがたい。今後、他のEU諸国と共に羊の価格競争に打ち勝っていけるか、疑問が残る。

4. ロドピ山脈とスタラ山脈の両地域においては、草地へのシダの進入、灌木類の増加、マツの進入から、1989年以降の著しい羊の頭数の減少が実証できる。しかし山頂部、特に1,000m以上の高地では1959年以降に既に樹木が入り始め、今日では林地化してしまっている草地面積も大であることがわかった。この林地になった草地を再度草地へ回復させることは不可能だと思われる。

謝辞

本研究は平成19年度と平成21年度の科学研究補助金、基盤研究B、課題番号19401003、「社会体制の変革に伴う移牧の変貌と土地荒廃」(代表者吉野和子)によって行った。

ブルガリアの調査にあたり、ブルガリア科学アカデミー地理研究所の全面的な協力があって実行できたものであり、とりわけDr. Pieter PETLOVには現地の聞き取り、カラカチャニへの引き合わせなど御苦労いただき、多大なご協力をいただいた。そして、木村真氏(日本女子大、法政大学非常勤講師)にはブルガリア語から日本語への文献の翻訳をしていただき、ブルガリアの歴史的、文化的な側面について多々御教示いただいたことを記してお礼申し上げます。

参考文献

- CHANG,C.(1999): The ethnoarchaeology of pastoral sites in the Grevena Region of Northern Greece. in "TRANSHUMANT PASTORALISM IN SOUTHERN EUROPE. Recent Perspectives from Archaeology History and Ethnology." eds. by L. BARTOSIEWICZ and H.J.GREEN-FIELD. 245p., 133-144.
- EFSTRATIOU,N.(1999): Pastoralism in highland Rhodope: Archaeological implications from

- recent observations. in "TRANSHUMANT PASTRALISM IN SOUTHERN EUROPE. Recent Perspectives from Archaeology History and Ethnology." eds. by L. BARTOSIEWICZ and H.J.GREENFIELD. 245p., 145-158.
- FAO HP : <http://faostat.fao.org/>
- 小林 茂 (1974) : ユーゴスラヴィアの移動牧畜. 人文地理, 26 (1), 1-30.
- MORI,K.,URUSHIBARA-YOSHINO,K.,et.al. (2006) : Primary Cause of Water Pollution in the Headwaters of River Cibin, Central Romania, with Special Reference to Sheep Overgrazing. Physical Geography,U.S.A., 27(4), 308-315.
- PIMPIREVA,E. (1994) : Karakachanite v Bulgaria (日本語訳 ブルガリアのカラカチャン). Sofia, 219p
- SHIRASAKA,S. (2007) : The Transhumance of Sheep in the Southern Carpathians Mts., Romania. Geographical Review of Japan, 80(5), 94-115.
- 漆原和子 (2009) : ルーマニアにおける社会システムの転換に伴うヒツジの移牧の変貌, 立教大学観光学部紀要, (11), 39-52.
- URUSHIBARA-YOSHINO,K. and MORI,K. (2007) : Degradation of Geocological and Hydrological Conditions due to Grazing in South Carpathian Mountains under the Influence of Changing Social Structure in Romania. Geographical Review of Japan, 80(5), 76-93.
- 漆原和子・ピーターペトロフ (2008) : ブルガリアにおける EU 加盟後の羊の移牧の変貌, 法政大学文学部紀要 (57), 57-67.

Transfiguration of Sheep Transhumance in Bulgaria since the Change from the Socialistic Regime

URUSHIBARA-YOSHINO Kazuko

Abstract

Bulgaria underwent a change from a socialistic regime in December 1989, and joined the EU as a member in January 2007. This article describes the transfiguration of sheep transhumance in accordance with these political and economic changes in Bulgaria.

Before the First World War, intermediate-stationed transhumance of sheep was common. Bulgarians and Karakatchans moved up into the highlands of 1,400 ~ 1,600m a.s.l. in the Rodopi and Stara Mountains during summer, and down to the Aegean and Black Sea coasts during winter. After the Second World War, sheep transhumance continued under socialistic control. The Bulgarians had their summer camps, which were huge cottages for 50 shepherds and their sheep, in the Rodopi region. The Karakatchans stayed in cottages, with sheep, shepherds and families living together, in the Stara Mts. after 1959. The Karakatchans have lost their own culture and techniques of transhumance since 1959, because strong pressures for socialization of the people made it difficult for them to move freely with their sheep in the mountainous areas.

The number of sheep decreased sharply after the collapse of the socialistic regime in 1989. After Bulgaria joined the EU, sheep numbers still remained small in that country. These changes in sheep numbers have had a strong effect on the degradation of grassland as pasture. The pasture areas in the Stara Mts., in particular, have undergone afforestation since 1959 in the absence of strong stress from sheep grazing, because transhumance was stopped. In the mountain highlands, bushes and trees invaded the pastures after the collapse of the socialistic regime. Some places have *Pinus sylvestris* 16-20 years in age spreading in previous pasture areas. It seems that the quality of pasture grasses has become very poor for sheep. It can be said that the great potential for sheep transhumance has been lost in the pastures of Bulgaria already.

Keywords: ascending transhumance of sheep, Rodopi Mountain, Stara Mountain, Karakachan, EU member